

往生記投機抄

書下文

## 〈凡例〉

- (一) 本訓読は、林彦明校訂『昭和新訂 三卷七書 全』（第四版、昭和十八年、総本山専修道場）を底本とした。
- (二) 漢字表記は、平易を旨とし可能なものは常用漢字に改めた。
- (三) 本訓読中、改行は内容に応じて適宜施した。

# 往生記投機抄

いままに、この『往生記』を釈せんとす、大いに分ちて二と為す。一には、初めより十六重の終りに至るまでは、これ正積なり。二には、「末代衆生」というより已下は総結なり。初めの中において、また三有り。一には、難遂機。二には、四障四機。三には、往生の機なり。起尽見るべし。総じてこれを言わば、今のこの『往生記』は、まず往生の得不得の機分を挙げて、然して後に、正しく往生の得不得の心行を知るべし。これすなわち疾前無薬、機前無教の故に、まず機分を知るを以て、しかも最要と為す故に、最初にこれを伝えるなり。一家の釈の中に、機法二種の略釈、就人就行の広釈、ともに人と機とを先と為す。法行を後と為す。全くこの意なり。云

## 一に、難遂往生機の下

この十三人の中において、初めの四人は至誠心に翻対し、次の四人は深心に翻対

し、次の四人は回向心に翻対し、後の一人は広く三心に翻対す。問う、初めの四人、至誠心に翻対する、その相如何。答う、初めの一は、恭敬修に順ぜずして、憍慢の心に墮するの人なり。次の二は、無貪の心に順ぜずして、貪着の心に墮するの人なり。また初めの一は、名聞の人なり。次の二は、利養の人なり。また一と三とは、ともに未具と退者とに通ず。第二は、偏に退者に局る故に、誠心の言有り。已上の三人は、至誠心の別積なり。第四の一人は、厭は強く、欣は弱き人なり。この一人はこれ誠心の総積なり。謂く、欣心弱き故に、憍慢の心有り。欣心弱き故に、布施に貪を生ず。欣心弱き故に、信施を厭わざるなり。至誠心の下の三業離合の止悪修善に、十重の厭欣有り。すなわちこの謂いなり。問う、凡夫の行人、誰か布施を貪せざるや。答う、もし欣心強き人は、貪すといえども著せず、還つて貪無きがごとし。たとい本尊聖教供仏施僧等の資糧を為すといえども、厚く自身の衣食に耽らず。何にいわんや、自ら恚に妻子等を眷養せんをや。請い願わくは、誠心具足の人、宜しく思量して自ら退転を恐るべし。問う、次の四人、深心に翻対す。その相、如何。答う、初めの一は、波の上に水月を見るがごとし。次の一は、行人の多岐に遇うがごとし。次の一は、君、事えるに向背有るがごとし。これすなわち、次のごとく、心弱と多境と時少となり。また初めの一は、恭敬修に翻対し、次の一は、無余修に翻

対し、次の一は、無間・長時の両修に翻対す。また初めの二は、偏に未具に局り、第三の人は、未具と退者とに通ず。已上の三人は、これ深心の別釈なり。第四の一人は、これ常に疑心を生ずる人なり。この一人は、これ深心の総釈なり。謂く、疑煩惱を生ずるが故に、信心深からざるなり。疑煩惱を生ずるが故に、信心一ならざるなり。疑煩惱を生ずる故に、信心相續せざるなり。生死の家には、疑いを以て所止と為すは、この謂いなり。問う、下機は多分、若存、若亡なれば、不生なるべし、何答う、本願を忘るるがときは、これを若亡と嫌う。たとい下機なりといえども、随分に仏願の甚深なることを信ぜば、何ぞ往生せざらん。二河白道の譬え、これを思うべし。問う、凡夫の行人、誰か信心相續せん。答う、煩惱の間断には、念と時と日との三相続を許す。今、信疑間断して、信、不相続の故に、難遂の機に属するなり。問う、凡夫は、疑煩惱を断ぜず、誰か信心を生ぜん。答う、もし所難のごとくならば、見惑未断の人は、すべて仏法を信すべからずや。彼の凡夫、生得の疑煩惱は、四諦の理においても、有耶無耶の二心未決なり。今云う所の信とは、またこれ凡夫生得所具の心の心所なり。何ぞ、信を生ずること無からんや。あるいは知識に従い、あるいは経巻に従い、仏法の義において、信を得ること、この心の心所を具すればなり。請い願わくは、信心成就の人は、ただ仏語を信じて、宜しく信の退を恐るべし。問

う、次の四人は、回向心に翻対する、その相如何。答う、初めの一人は、専求の心に順ぜず。謂く、作務の縁に近づく人は、唯願・唯行の法を失するなり。次の一人は、他力の心に順ぜず。謂く、道理を得といえども、偏執改め難き人、罪福因果の理に滞つて他力願生の心を発さず。次の一人は、平生は願生の者にして、臨終に失念する人は、これ捨命退に当たる。後の一人は、臨終に悪縁に遇つて、願生の心を退失する人なり。已上の四人は、ともに回向心の別釈にして、総釈無し。初めの二人は平生難遂の人、後の二人は臨終不生の人なり。また初めの二人は、未具に局り、次の一人は、退者に局る。後の一人は、未具と退者とに通ず。謂く、己具の悪縁に遇つて退失する有り、また未具の悪縁に遇つて願生せざるも有るが故なり。またこの四人の第一は、他縁の難遂、第二は、自因の難遂、第三は、自因の失念、第四は、他縁の失念なり。請い願わくは、回向発願の人、自心を調べて、悪縁を退くるのみ。問う、後の一人は、三心に翻対する、その相、如何。答う、浄土の教文を見聞して、僻見を發す者に付けて、まさに二種の相有るべし。一には進、二には退なり。もし利根の人は、悪人往生の文を見て、進んで悪無碍の見を發す。もし鈍根の人は、善人超入の教えを聞いて、退いて疑怯羸の心を生ず。これらの二人は、進退ともに、あるいは三心を具すること能わず、あるいは具すといえども還つて退失するなり。高祖、また衆に示して曰く、口伝無くし

て浄土の法門を見れば、得分を見失うなり。謂く、往生浄土は、上は龍樹・天親より、下五逆十悪に至り、多は十萬・六萬より、少は一念・十念に至つて、齊しく往生することを得。所以に上根の善人の往生を説くをば、彼等が為に説くと見る。下根悪人の往生を明すをば、我等が為の教えと思ふべし。故に進退の失無きなり。

云

二に、四障四機の下  
見るべし。

問う、卑下心もまた、これ卑下慢なるや、如何。答う、卑下の当体は、これ慢心に非ず。卑下に依つて、慢を起すを、卑下慢と名づく。然るを、世人以為えらく、心中には我れ勝れりと思ひ、口には我れは劣るなりと言ふ、これ卑下慢なりと。云これ更に以て爾らざる事なり。云う所のごときは、これ妄語なり。卑下慢とは、他の多勝に対して、我が少劣において、幾も劣らずと、高举するこれなり。今の卑下とは、ただこれ自身は罪悪と謙下するのみ。なんぞ必ずしも、これ慢の類ならんや。

三に、種種往生機の下

文もんに自らみずか五段ごだん有り。中なかにおいて、すなわちその二十にじゅう六人ろくにん有り。開かいすれば、すなわち三十さんじゅう人にんなり、謂いわく、愚鈍念ぐどんねんの第十三だいじゅうさんの別時念べつじねん仏往生ぶつおうじよう人にんに、五人ごにん有る故ゆえなり。今いまはこの五段ごだんの中なかの第一だいいちなり。智行ちぎょう兼備念けんびねん仏往生ぶつおうじようの機きの中なかの第三だいさんは、これ宗しゅうの本意ほんいなり。前さきの二には本意ほんいに非あらず。第二だいにの義解念ぎげい仏往生ぶつおうじよう人にんの中なかに、第一だいいちはまたこれ宗しゅうの本意ほんいなり。後のちの二には本意ほんいに非あらず。ただし第三だいさんの人ひとは、意い、兩向りょうこうを兼かぬ。第三だいさんの持戒念じかいねん仏往生ぶつおうじようの二人にんと、第四だいしの破戒念はかいねん仏往生ぶつおうじようの二人にんとは、またこれ宗しゅうの本意ほんいなり。中なかにおいて、第四だいしの第二だいには、ようやく大信だいしんに近ちかし。然しかれども、なおこれ施化利生せけりしじょうもん門もんの分齊ぶんざいなり。第五だいにの愚鈍念ぐどんねん仏往生ぶつおうじようの人ひとは、正まさしくこれ宗しゅうの本意ほんいなり。またこれ発迹ほつしやく入源門にげんもんの単信たんしんの大信だいしんなり。中なかにおいて、初めはじの三人さんにんは、正まさしくこれ単信たんしんの大信だいしんなり。次つぎの二人にんは臨終りんじゅう回心くわいしんの大信だいしんなり。次つぎの一人いちにんは、あるいは外虚内実げこなないじつの道人どうじん、あるいは云いわく、奉ぶ公官家こうくわんけの俗人ぞくにんなり。第七だいち、靈地結縁れいちけちえんい已下げげは、これ意業いぎよう修善しゆぜんの大信だいしんなり。つぶさには文もんのごとし。云云

二、總結分そうけつぶんの和字わじの法語ほうごは、別べつの子細しさいな無ゆえき故ゆえに、これこれを積しやくせざるのみ、畢おわぬ。



御本ごほんに云いわく明德元年めいとくがんねん庚午じゆういちがつに十一月二十八日じゆうはちにち

(異筆) 弟子でし穩蓮社おんれんじや授じゆよ与よせしめ畢おわんぬ。

空師くうし七代しちだいで弟子でし了りようよ譽よこれを記しるす 在判

安譽雲潮あんよ うんちよう二十二歳の時これを書す

釈道譽しゃくどうよ 花押

